

【体育科】教科提案

「体育大好きふぞくっ子」が育つ授業の工夫

～一人一人の学びを導くみとりと支援～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

本校の学校提案は「学びをデザインする子どもたち～課題意識の深化を通して～」である。この学校提案を受け、今年度体育科の研究テーマを「『体育大好きふぞくっ子』が育つ授業の工夫～一人一人の学びを導くみとりと支援～」とした。

本校では学びをデザインすることを「学ぶ筋道を考えて課題解決に向かう」とし、子どもたちが主体的に学ぶ姿をめざしている。運動に取り組む体育においては、苦手意識など主体性を阻害する要因もあることから、まず授業では、単元で取り組む運動の楽しさを一人一人が味わうところからはじめる。次に個々に生まれた「もっとできるようになりたい」などの思いが実現できる授業を展開していく。つまり体育における学ぶ筋道とは「自分の中に生まれた思い」を実現させる探求の過程と考える。そして、教師が個の思いを丁寧にみとり支援することで、サブテーマの「課題意識の深化」が促され、学びをデザインすることになると考える。

(2) 体育科でめざす子ども像

- 1：体育の好きな子
- 2：運動が上手にできる子（やった，できた！）
- 3：運動の構造的特性について考える子（あっそうか，わかった！）
- 4：仲間と力と心を合わせて運動を楽しむ子

上記の4点の子ども像をめざし、教師は一人一人の学びを導くみとりと支援を行い、各単元を進めていく。そして、運動に対する個や集団の思いを主体的に解決していく体育の学び方を、意図的・計画的に身につけさせる。

1の「体育の好きな子」を言いかえるとすれば、毎時間の体育が待ち遠しくてしかたないといった子のことである。笑顔で元気いっぱい走る子(図1)、夢中になってボールを追いかける子、そんな姿がめざす子ども像の一つである。



(図1)

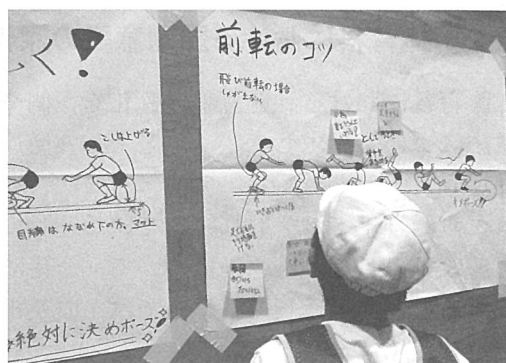
2の「運動が上手にできる子」とは、思い通りに自分の体を動かすことができる子、技能をもった子のことである。体育科において、技能が重要な学習内容であることは明確である。また技能の獲得は、

更なる意欲と課題意識を生むことから、体育科の学びを成立させるために、上手にできるようになる子どもの姿をめざすことは欠かせない。「上手にできない運動」が「できた」ときの喜びは、体育独自の感覚であり、その経験は運動場面における自己肯定感につながっていくと考える。

3の「運動の構造的特性について考える子」とは、運動にじっくり向き合い、技能の構造について考えられる子のことである。自分の体の動きを意識して運動する態度や、例示された動きや友だち

の動きと自分を比較する態度（図2）などは、運動場面で出合う様々な課題を解決していくために必要な資質であると考ええる。

4の「仲間と力と心を合わせて運動を楽しむ子」とは、仲間とともに、記録の向上をめざしたり、よりおもしろくしたりして運動に取り組む子のことである。体育の授業では、友だちと思いを交流し、意見を聴き合う中ことで、自分やグループの成長や新たなおもしろさが実感できる体験を積んでいけるようにする。



(図2)

2. 体育科学習における「学びをデザインする子どもたち」

体育科において、教師がめざすものは「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎をもった子どもを育てる」ことである。そこから本校体育科では、体育科学習における学びを「運動のおもしろさや楽しみ方」「体の動かし方」を習得していく営みであるにとらえ研究を進めている。

そして、その学びを子どもたちがデザインするということは、「もっとおもしろくしたい」「もっと上手になりたい」など、一人一人が「課題意識」をもって、意欲的にその解決に向け活動していくことであると考ええる。

(1) 体育科におけるみとりと支援

単元に入る前には、取り組む運動に対する個の思いをみとるために、アンケートをとる。これは運動経験の有無だけでなく、どこにおもしろさを感じているか、どこに苦手意識をもっているかなどを把握し、学習内容を設定するためである。どの単元でも既存の運動に子どもを合わせていくのではなく、目の前の子どもに運動を合わせた授業づくりを大切にしている

1時間の授業のふり返りでは、子どもの学びをみとるために「よい授業への到達度調査」ⁱの取り組みも進め、一人一人の支援に活用している。

体育学習カード	
()年 ()組 名前()	
1 精一杯に運動することができましたか？	はい…どんなことですか？ いいえ…なぜですか？
2 技や力を伸ばすことができましたか？	はい…どんなことですか？ いいえ…なぜですか？
3 「あっ、わかった!」「うん、なるほど」という発見がありましたか？	はい…どんなことですか？ いいえ…なぜですか？
4 仲間の人と教え合ったり、助け合ったりして練習(運動)できましたか？	はい…どんなことですか？ いいえ…なぜですか？

(図3)

また単元のはじめと終わりや学期のはじめと終わりなどに「態度測定」ⁱⁱによる体育授業診断法を活用し、客観的に教師のみとりと支援が適切であったかをふり返られるようにしている。

(2) 体育科における課題意識の深化について

体育科における課題意識の深化を、個や集団で取り組む運動の特性に迫り、よりおもしろくする方法について探求していくこととし、発達段階を考慮して、後述のように低中高に分けその深化を設定した。

まず低学年では、取り組んでいる運動について、主に場や器具などを工夫することで、中学年では、取り組んでいる運動について、一緒にしたり、競争したりするなど友だちとのかかわり方を工夫することで、そして高学年では、取り組んでいる運動について、主に自己の変容をめざすことと設定した。

(3) 実践事例

校内研究授業で見られた課題意識の深化

低学年「多様な動きをつくる運動遊び」の実践から

i) 課題：フラフープをまわそう、ころがそう

深化の例

- 回しながら歩くことができるかやってみよう。
- フラフープの本数を増やしてもできるかな。(図4)
- ころがしたフラフープをくぐりぬけたいな



(図4)

ii) 課題：跳び越えよう

深化の例

- クッションをおいてこわくないようにしよう。(図5)
- 友だちと2人でもジャンプできるかな。
- 高くつんだダンボールをとびこえたいな・



(図5)

iii) 課題：大なわとびをとぼう

深化の例

- 大なわとびをしながら、いどうできたよ。
- 大なわのなかで、フラフープをとんでみたいな(図6)
- 大なわに、友だちと2人で入ってとんでみよう。



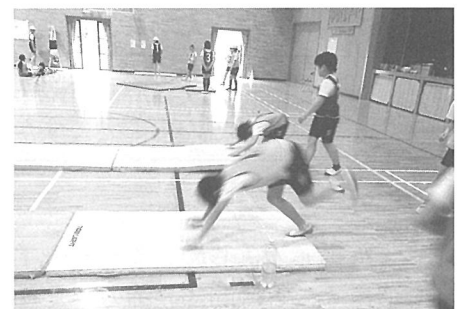
(図6)

高学年「器械運動 マット運動」の実践から

i) 課題：跳び前転をしよう

深化の例

- ゴムのバーをもう少し前にしてみよう
- 大きな前転→跳び前転(図7)

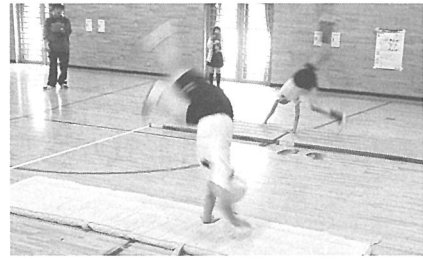


(図7)

ii) 課題：側方倒立回転をしよう

深化の例

足が上がらない→腕立て横跳び越しで、少しずつ足の位置を高くしていこう (図8)



(図8)

3. 研究の展望

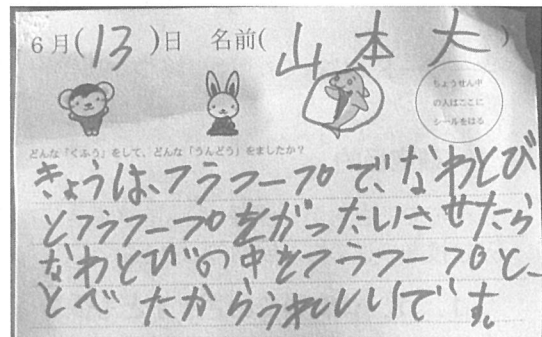
一人一人の学びを導く重要なポイントとして次の3点が考えられる。今後の研究の視点としたい。

(1) 単元で取り上げる運動の「おもしろさ」をはっきりさせる

運動に親しむ子どもを育てるためには、子ども自身がまず運動のおもしろさがわかり、運動をやってみたいと思えなければならない。つまり「いま、ここにいる子ども」からみて、何がおもしろいのかをみとり、課題の設定や学習過程を予想していく。

(2) 一人一人のみとりと支援を充実させる

授業のまとめには「学び」をふり返り、学習カードに記入する。(図9)カードは、一人一人の課題意識がみとれるような内容にする。内容を時系列でまとめることで、変容もみとっていく。また単元のはじめと終わりに実施する「学び方」アンケート、態度測定による体育授業診断法も活用する。



(図9)

(3) 「子どもと教師」「子どもと子ども」の協同的な学びによる課題の解決を図る

課題の解決にむけた学習場面において、教師は、友だちの動きを観る場を設定する。(図10)そして、体育カードで記入した内容を伝える場も設け、話し合い活動における言語的な相互作用を重視していく。

子どもたちは、言語化によって動きのコツを共有し、友だちの動きを自分のものにしていけると考える。



(図10)

4. 研究の評価

一人一人の子どもが「どのように運動のおもしろさをつくってきたのか、運動を好きになれたか」に視点をあて、研究をふり返る。

方法として、実際の活動の様子、学習カードやグループ(チーム)ノートと、支援の内容を照らし合わせ、単元における個や集団の変容をみていく。そこから、みとりと支援が適切であったかどうかを判断することができる。また態度測定による体育授業診断法を用い、主観に頼らず客観的な分析も行う。

i 「よい授業」への到達度調査 小林 篤(1978) 体育の授業研究, 大修館書店, pp.224-258.

ii 態度測定<小学校低学年(1, 2年生)用>梅野圭史・辻野昭(1980)「体育の授業に対する態度尺度作成の試み—小学校低学年児童について—」, 体育学研究, 第25巻第2号, pp.309-319.